J. Rakuno Gakuen Univ,. 17 : 33 ～ 44 (1992)

F. ヘルダリンにおける“静けさ”について

岩 井 洋*

(Über “die Stille” in den Werken F.Hölderlins

Hiroshi IWAI*

(March, 1992)

序

そしておお　一切を支えてくれるもの　汝は私をもそのように支えて
移ろいやすきわが心を抑えてくれる，
だから私は今日祝祭を催すのであり，
夕べの静けさの中
聖霊はあたり一面に花咲くのだ。
(Lüders, Text Friedensfeier Erste Entwurfsphase S. 321 ～ 322)
光を遮ってくれる眉からの如く
世から忘れられた
聖なる文から　静かに輝く力が降り下るとき，
恵みを喜びつつ
彼等は物静かな目で自らを
鍛え上げてゆくのだ。
(GStA2, 1 Patmos S. 171)

聖書の静かに輝く光という言葉は重くまた深い。あまねく支配する父は，自らを啓示する文字であり，確固たる揺るぎなき真理を語る聖書が，よく解き明かされ，その真理が現実化されると人々が信ずることを望む。この望みが静かな輝きの中に現されている。ここに，ヘルダリンにおける聖書の位置付けとそれへの依拠の様が語られている。ヘルダリンほど，人生上思想上特に人間形成の上で多くかつ深く聖書に係わった詩人もいない。絶対的に揺るぎなき真理を宿す聖書は，彼の人生の師であり続けたのであるが，そのように彼の頭上にいて，彼の営みに係わらず，真理を生み出し，かつ自らが真理である聖書は常に静かに輝いていたのであろう。

ヘルダリンにとって，ディオティーマも常に静かな美しさに輝く人であった。彼女の美しさは，主体の判断を越えた，超越的にして，至高の高みをこえた力の具現されたものとして，完成された力として静かに揺るぎなく存在する美であったためなのであろう。

さあ！　わが祖国よ，汝の高貴さが，
新たな名で称えられんことを，汝　時代の最も成熟した果実よ！
……。
未だに汝はためらい黙しつつ，汝を語る新たな事業を思念している，
汝自身と同じく唯一愛から生まれ，汝に似た新たな姿を思念しているのだ。
(GStA2, 1 Gesang des Deutschen S. 4 ～ 5)

祖国は沈黙の中にあってもなお，その心は沸き立っている。新しい事業は静かにドイツの人々の中に予感されつつ，次第に形となって顕になりつつある。ここでの沈黙は，動きを内に秘めた沈黙なのであって，静けさが動きと変化生成という，沸々とたぎる局面，ヘルダリンが神の工房（Werk）と名付けた局面も備えた，一種Oxymoron（矛盾語法）的な意味も込められている。静けさと生動性との打ち続くうねりと，パラドクシカルな絶妙の整合性もヘルダリンの詩の魅力の一つではあるが。ヘルダリンにおける静けさとは，表面的な現象ではないし，人間の心を慰撫する逃避空間ではないのではないか。それは深く込められた思いのもとで意味が与えられたものであり，その思いはヘルダリンの世界意識を反映するものではないか。この論文では，ヘルダリンの作

*教養科，独語研究室
Department of General Education (German), Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido 069, Japan

品において，重く深い意味を担っている静けさと，聞くというそれと連動する行為がいかなる意味を担うものかを検討するものであり，取りも直さず，ヘルダリンの詩の原点を分析しようとするものである。

1.

ヘルダリンの作品では，自然は大いなる連鎖の中で宇宙的な規模で人間を包み込んでいる。自然の柔らかな愛撫が施されることによって，人間の心は穏やかな安定を得ることができる。気分の不安定さは，自然の腕から外れてしまったためであり，一方，心が平和で敬虔になるのは，自然の腕の中で休らう時，世界の真の創造主に自らを委ねた時である。創造主の威光に浴す時，内なる調和に目覚め安定した生の軌道に立ち戻りうるのである。人間がそこから生まれたところの源，それが作る連鎖の中に自らを置き，自らを委ねた時，源に戻ったという安堵感が気分を立て直してくれる。ヘルダリンにとって神の造営たる自然がこの世では主たる存在を占め，はるかに巨大で，本来的で，源たる生産性を秘めたものなのである。

今や，一陣の風が吹き来たり，森の梢を揺する，見よ！ わが大地の影，月がひそやかに立ち昇る。陶酔せし夜が，星をちりばめて，我等のことなど知らぬげに，驚嘆すべきそのものが今や照り輝き渡るのだ。その，人間等にとって馴染みのないものが，山々の高みのかなたに，悲しげにかつ壮麗に昇って来たのだ。
(GStA 2, 1 Brot und Wein S. 90)

この崇高なものの恵みは計り知れず，それがいつから，何をもたらしたのか知るものはない。あくまでもそのように，夜は，世界と人々の希望せる心とを動かし，賢者さえも，夜が何を準備しているかを知らない。というのも，汝を好むあの最高神がそのように願い，それゆえ，汝には夜よりも昼のほうが好ましいのだ，しかし，時には，賢明な目も影を好み，必要とする前に眠りを好み，あるいは，誠実なる心を持つ者は，夜の中を覗き込みたがるのだ。そうなのだ，夜を花冠と歌とで崇めるのは良いことなのだ，というのも，夜は迷う者と死者らとに崇められているからであり，それが，最も自由なる精神のままに，永遠に自存しているのだから。
(Ebd. 2, 1 S. 90 ～ 91)

近代の人間の世界意識が，なだれをうつごとく相対化していく中で，むしろ自然に優位性を求め，人間がそれに付き従うべきであるという世界意識は，〈Brot und Wein〉における昼と夜との転換と，夜の登場の中に集約されている。それは，歴史の流れを歴史主義的にではなく，普遍的力の外化として見る黙示の実現と言ってもよい。とりわけ，夜が，それ自らによって存続し，最も自由な精神を持っている威圧感や，人間存在を越え，それを呑み込むほどの測りがたき深みなどは，人間の知の理解し得るものではもはやない。昼の世界は，夜という大海に浮かぶ小島でしかない。人間の迷妄や錯誤は，人間が夜を異郷の客としてしまっており，その世界の威力を馴染みの無いものとして異化しきれず，分離してしまっているがゆえなのである。

世界を本質的に形成している層，世界の本源的な力は人間たちの営みに係わらず，ひそやかに，隠れつつ現れる。このような性向であるがゆえに，夜は自らの表面に昼という被いをかぶせて，その背後に潜みつつたち現れているとも言えるのである。強い光に対する拒絶感，不信の感情はヘルダリンのみならず，彼の時代の時代感覚でもあった。文明化により世界を人間化しようとする彼の時代の大いなる迷妄にたいして，ヘルダリンはそれを拒み，人間を人間らしく，つまり人間を自然の中に置いて守ろうとする。それは抵抗あるいは制御行為である。ギラギラとした輝きを表面の虚飾とする昼の世界の背後に，実は，閉ざされ，秘められた空間が息づいており，むしろそれこそ，人間的な自由な精神が謳歌しうる空間であり，失われた多くの精神が復活を待ち受けながら集っている本源的な世界層だとする思いが彼にはあった。このような思いはとりわけヘルダリンの言語表現の根底にある考え方である。つまり，可能なかぎり集約，集中した言語表現を目指し，可能なかぎり言葉を切り詰め，表現が多くの意味を内包し得るように言葉を鍛え上げ，それ自らによって存続しうる表現，言葉に言霊（ことだま）としての黙示性をも担わせようとする思いが潜んでいる。まさに〈Brot und Wein〉の夜のごとき言語表現が彼にあっては求められているのである。

「ヘーゲルは歴史を把えることに，最高の重きをおき，歴史に哲学上の形姿を与えた近世最初の哲学者である。……。デカルトにせよ，ライプニッツにせよ，またカントにしても，歴史を問題にすることはあまりなかった。歴史は中世では世界の終末によって規定されていたが，今や，歴史が解き明かすべき課題と化したのである。……。

中世世界から脱け出してくるなかで，人間は，自分が

歴史の客体以上のものだ，という経験をするだけではない。時代をこえて行為し，現実を動かす主体，即ち，人間というものを，以前よりも強く認識するようになる。」1）

フランス革命を祝い，自由の木を打ち立てたテュービンゲンの一夜は哲学者と詩人とに終生変わらぬ共通した現実感覚をもたらした。自らの時代が歴史上の大きな転換点であるという意識，黙示的な終末意識，弁証法的思考など，両者に共通する思考を与えたのはまさに時代そのものであった。個人がその知的精神を醸成しつつある時の時代状況は，その人間の現実感覚に永続的な一定の思考方法を植えつける。ちなみにゲーテは，彼等2人のそれに比べてはるかに安定し固定し，ある程度変化も予測できた時代状況の中で青春期を過ごしたため，現実の世界を，今のそれとして，ギリシャ人風に直視的に，現世的に捉えている。また，ゲーテの青春時代にはフランス革命がまだなく，理想の現実化とその破産を若々しい感性の中で捉えることがなかったため，理想と現実との分裂，世界を2層の質の衝突とその克服，その2つを軸に螺旋的に成長する有機体として，つまり黙示的に捉えることはなく，ヘーゲルやヘルダリンが持っている歴史的ダイナミズムは薄い。但し，ヘルダリンの詩的形象の中で，黙示的歴史意識よりなる2つの層の対立と克服は，分裂，分離とその宥和という予定調和的性格を与えられ，自然の弁証法のごとく唯物的ではなく，宗教色が色濃い。昼と夜とに象徴されているものがそれであり，明確に弁証法的というよりは宥和的であり，自熟的な性格をもっている。

しかし，ヘルダリンにあっても，世界の本質層の析出は時代自体の歴史事象の中に現れている。彼の歴史意識をもって時代の動きを分析している「亡びの中で生まれるもの」の中で，時代の解体は，現実態と可能態との，つまり，古い時代から新たな時代へと，歴史が入れ替わる際に，双方の根底に横たわる「無限の力」の感得として述べられている。

「祖国の没落あるいは移行は，現在の世界の個々の部分で感じられ，それは，新たに生ずるもの，若々しいもの，可能なるものが，現存のものの解体の瞬間と程度に応じて自らを感じるようにである。というのは，祖国なるものへの連想なくして解体は感じられえないからであり，現在のものが解体の中にあると感じられるはずであり，事実そう感じられるなら，そのさいには，諸関係や諸力の中で未だ汲み尽くされてはいないもの，汲みつくされえないものが感じられるのだ。」(GStA. 4 Das Werden im Vergehen S. 282)

この文の中にヘルダリンにおける2元的な歴史意識が明瞭に現れている。解体の感覚は，以前から今までという，一定の時間の幅を持つ歴史的時間意識を前提とした現実への意識と，不変的恒常的なる力への意識の2つの意識をもって生み出される感覚である。解体感覚と不変的な力に対する感覚は確かに相互的である。ここにヘルダリン独特の論理性があり，全体と個との認識の関連性についてもこのことは認められる。解体とは，無限の力の新たな，これまでは見えなかった関係が現実化され，素材やその関係が組換えられる時期なのである。それは，無限の力たる，「茫漠とし，むしろ恐怖の対象でさえある」（同上より引用）ところの恒常の生命がそれまでの一切の諸関係を失い，それみずからが析出されつつあると人々が感ずる時期なのである。少し後世界は新たな関係軸の中で出発することになる。衣を脱いだ世界が，解体期には出現するのである。これが，可能存在から現実存在への過渡期であり，これまで隠されていた可能な諸関係の中の1つが現実化し，目に見える状態に変容しつつある時期，今までは見えることなく存在していたもの，つまりイデアルな力が，可視的な力へと姿を換えつつある状態である。従って，夜とは生産性を秘めた，新たな関係の可能性を胎んだ空間であり，地上における非日常的空間として，新たな現実化の可能性を豊かに秘めた力実態である。夜は，地上的な，人間の認識能力を越えた異質な世界性に基づく，非日常的であり，しかし，夕べの到来として語られるごとく，日常的でもあり，卑近な世界空間でもあるのである。

このような解体の感覚にあっての夜のイメージは，「初めに，神は天地を創造された。地は混沌であって，闇が深淵の面にあり，神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。“光あれ。”こうして，光があった。神は光を見て，良しとされた。神は光と闇を分け，光を昼と呼び，闇を夜と呼ばれた。夕べがあり，朝があった。」（旧約聖書　創世記 1.1-5）という聖書の世界生成のイメージがある。光に満ちた昼は闇から生まれたのであり，光のない，闇の状態が母体としての始源性を得ており，それゆえに生産性を芽胎しているのである。さればこそ闇のことをヘルダリンは heiliges Wildnis（聖なる混沌）と名付けているのである。

2．

ヘルダリンと同時期，人間に関する知の主導者となっていたヘルダーは人間の感覚について，視覚は平面を司

り，光，奥行き，影などによって，物の立体的な像を獲得してくれると言う。(しかし，視覚の射程は，物の表面的な現象に限定され，また規定されがちであり，そのため，対象に対して，即物的に人間の側からの一方的な限定を行いがちであり，そのために内部までには入り得ないため，あくまでも平面的に物を把握せざるを得ない限界があることは付け加えなければならない。)

「我々は自己の外にある対象を，“横に並んでいる”ととらえる感覚，“時間的に前後するもの”ととらえる感覚，“内部的に入り込む”ととらえる感覚を持っている。即ち視覚，聴覚，触覚である。」2)

かくしてヘルダーは，視覚，聴覚，触覚を，それぞれ，平面性，時間性，立体性を感覚する機能として分ける。しかしその一方，聴覚について彼は次の様に述べている。

「耳の習慣ほど強烈で長続きし，繊細なものもない。一度でも深く刻み込まれると，なんと長くそれは続いてゆくことか。言葉をよくしゃべることができなかった子供時代に得たものが，現前せる生き生きした世界の現象とすばやく結ばれる時，それはなんと豊かに力強く再現されることか！」3)

ところでヘルダーは，自らの師で熱烈な敬虔主義者であったハーマンの影響で，世界との情感を基本とした関係を主張し，神的な啓示は情感の中に現れるという，ドイツ中世神秘主義の自己内沈潜の営みとともに，神的摂理たる民族の歴史的発展という摂理観的歴史主義を主張する。ピィエティスムスも，個的な体験を通した神の力の感得と救済の確信を主張するが，この際，個人と世界とを有機的に媒介し，体験を個人にもたらし，神の力を類（民族）の普遍性の中で民族の運命として感得させるのを情感の働きだとする。そして情感を基本的に支えているのが聴覚の機能なのである。つまり，個人としても，民族としても，歴史を通時的に，感覚を通して捉えうるのが聴覚なのである。というのも，聴覚は今この場での生き生きとした音の現象に触発されることによって，単に，今ここで起こった現象を前後の時間的関係で捉えるのみでなく，さらに，短い表面的な時間の流れを越えて，過去における個人の体験や思い出や，さらには彼の民族が固有に，持続的に，無意識のうちに内在化させていた思い出をも生き生きと再帰させるのであるから。そして，聴覚のこのような機能があるがゆえにこそ，民族の独自性が現れている音楽や文学，とりわけ詩文学が形成され得るとヘルダーは考えるのである。ヘルダーの民族詩論は聴覚の機能にその論拠をもつのである。

父なるエーテルよ！　その叫びが放たれ，ただちにそれは口から口へと千重の響きとなって伝えられた。かくして，生を一人で耐えねばならぬ者はもはやいなくなり，賜物は喜ばしく分かち与えられ，またそれが見知らぬ者と取り交わされて，一つの歓呼が生まれる。言葉の力は眠りつつ成長する。父よ！晴れやかな者よ！　と声があまねく広がり，太古からのみ印なる，親より受け継がれし言葉は，そのように的確に，創造的に，心をとらえつつ響き下るのだ。というのも，そのように，天上的なものらは立ち寄るのであり，彼等の日は，深く震撼させつつ，影の世界から人間達のもとへ降りきたるのだから。(Brot und Wein GStA 2, 1 S. 92)

音の由来は物の内部からであり，物の響きはその本質からの語りである。ドイツの民やドイツの歴史の現象の背後に潜み，その現象を司どり，その物の内部に存在する力の語りを聞き出す機能を持つのは聴覚しかないのである。父たる，晴れやかな者や歴史の成長を司る力などは視覚ではけっして捕え得ないのである。ここにヘルダリンにおける，民族意識の聴覚への依存性と，語られた文学たる叙事文学的性格が現れているのである。

「盲目の詩人」という作品においては，目が見えた時の風景から見えなくなってしまった時の風景への転換が描き出されている。地上の豊かな風景，明瞭な色，動き，輪郭など自分の身をやさしく包んでくれた全てはもはや見えず，今は闇しか回りにあるものはない。かつての日々の回想と音しか彼を支えてくれるものはない。しかし，彼はこのような内向化の営みの中で，耳に自らの営意一切を託し，集中化させることによって，目が見えていた時には見えず知り得なかった，神の地上へと投げかけられる力の現存を察知出来たのであった。過去と未来へと広がってゆく時間連鎖の広がりの中で，過去の営みとの連なりはもとより，来るべき神が自らを予示する声はいたるところ聞こえていることを知り得たのであった。今や彼には本当の意味で世界や物が見えてきたのであり，盲目となることでむしろ，真理が隠蔽性の本質から非隠蔽性へと転じたのである。

「神があかそうとすることが未来を形成する。前走する言葉の出来事が歴史を形成する。ヤハウェの言葉は予言者に媒介されることによって効力を持ってくる。」4）

ヘレニズム（ギリシャ）は彫刻の美に象徴されるように視覚を基調とし，ヘブライズム（ユダヤキリスト教）は聴覚を基調とすると言われる。聖書は，神，イエス・キリストの人々への語りかけを予言者あるいは使徒が聞き伝えたものであった。キリスト教文化そのものが語りを基調に担われているのである。目に依るということがいわば世界内的な次元という限界の中で，物事についての認識を誘発し，現象に依存し，知性をもって分析的に物事を受容していく，いわゆる科学的姿勢である。その一方で，信仰の次元ではあくまでも個人としての，人間的な世界関係を維持せんとする中で，物事の背後に潜む超越的力，神的な法，摂理，世界の起動力たる力に感覚の超人的な修練を通して触れることが時に目指される。従来キリスト教にあっては，制度化された教会が，神と信者とを媒介していた。しかしヘルダリンの時代にあっては，宗教的体験は，個人のパースペクティブへとアクセントを移動している。非正統派としての誹りを受けていたベーメ以降のドイツ神秘主義の流れが，個人主義という1つの時代潮流に極めてよく合致し，個人の内への目を導き，18世紀精神の宗教的基盤たるピィエティスムスに開花したのである。つまり，ピィエティスムスは決して宗教的な潮流にのみ収まらないのである。近代の知の営みがいまだ脆弱であった時期，それは宗教という自らの母体から多くの養分を近代の人間的な知の営みに対して分け与えたと言ってよいのである。ピィエティスムスにおいて，個人は，個人の内的な情感を通しての神的な力との触れ合いという形で近代的な装いを得たのであった。個人の内的な情感－内なる目－を通した神的な力との触れ合いが，聴覚をもっての内向的な営みの中で得られてくるのである。

ヘルダリンは論文「言語表現のための覚書き」(GStA 4,1 Wink für die Darstellung und Sprache S.260～265) の中で，詩作のプロセスを（素材の）精神化の技術だと述べている。素材対象（ヘルダリンの詩は詩的素材をとる叙事詩的性格が強い）との内的な触れ合いを通した無限なる共鳴化の中から，生の感情が生じてくる。この感情は，心の中での内的な不調和状態を繰り返す中で，次第に無限化と有限化を繰り返し，自らの限界を次第に乗り越えながら，やがては試みの総合作用として，かつての生の感情をこだま（Wiederklang）という形で再び獲得するのである。

しかし，彼等の服が触れ合い，相手の言葉が誰にも理解できなかったとき，もしも木々の梢の間から涼しさが訪れず，また，とげとげしい心になっていた人々の顔の上にしばしば微笑みが浮かばなかったとしたら，いさかいが起こったかもしれなかった。こうして彼等は静かに見つめ合い，それからお互い愛をもって手を差し出し合ったのだ。
(GStA2, 1 Die Wanderung S. 139)

体験の中で，無限なる生の感覚が，詩人の心の中で新たなる存在空間を見いだし，その時彼の心の中では，自然のこだまが鳴り響いている。「ドーナウの源にて」の作品では，人間の言葉に先行する原初的な営為，つまり笑顔，身振り，「シュトゥトガルト」では握手，さらには，乾杯，合唱など言葉を介することのない行為が，人間と人間との真心からの，本源的な了解を可能とするのであり，言葉を介しえないが故にこそ，内なる真心からの，純粋な思いや喜びが，本質的な共鳴の中で伝えられ合い，かくして文化や文明の伝ぱんが基本的に可能となるのである。また，「平和の祝祭」や「あたかも祭りの日におけるがごとく」で示される喜ばしきみなぎりは，言葉を超えた真実の，本質からの共鳴による集いの中で，万物が会する宥和の中で，一切が集い，会し，いわば互いに溶け合う中で生み出されるものなのである。それには，同時に，対立，差異が解消し融和（宥和）がなされたこと自体が与えてくれ喜びも加わっているのであって，宥和と喜びとは相互に弁証法的である。

このように宥和の営みが，人間と人間との間のみならず，今や詩人と詩的素材（感情という素材）との内的な融合（宥和）となっているのである。生の感情と言われているものこそ自然と心との融合なのである。しかし，これはまだ無限定な段階であり，反省という，対立的な試みを経て次第により高い最高の形式を得，やがて生の感情のこだまを感ずるようになり，無限の中に無限の自己として自らを再発見するのであり，初めて最高の形式，つまり内的なる詩人自身と，外的で異質なる詩的素材を横断し貫く共鳴音たる音調（Wiederklang der ursprünglichenlebendigen Empfindung）が与えられるのである。

この時にようやく言葉が予感されるようになり，感情の精神化が完成され始め，さらなる創造的反省を経て具体的な音調やリズムが与えられるようになる。詩化のこのような過程については，リルケの「オルフォイスに寄

せるソネット」でも詩作の神秘主義的な営み，出生が描かれてはいるが，特にヘルダリンにおけるこのような過程は，とりわけベーメの神秘主義や，ピィエティスムスの再生論を彷彿させる。自己内への潜心による神的なものとのかすかな触れ合いと，自意識の変革を通した，世界との関係の質の変革であり，それによる再生である。ベーメの神秘主義，その系譜下にあるキィエティスムなども，ピィエティスムスともに自己内への集中化を通して外的なもの一切，目に見える形となっているもの全てを自ら遮蔽し，言葉や思考を滅却し，自己内に集中的に沈潜し，内面世界の広がりと深みの中で神的な力に静かに浴することを目指していた。そしてこの過程を経る中で，神の僕たる意識を高めてゆくのである。この系譜が近代個人主義の流れと合致し，キイエティスムは甚大な影響力を，とりわけ芸術活動に及ぼしたのであった。

このような詩文化の過程の中で，ちなみに自然（風景）の声は詩人の操作という，必然性が欠如した経過の中においてではなく，対象との弁証法的なうねりのなかで，詩人の心情と自然のこだまとが言葉へとうねり高まってゆくのである。つまり，対象によって誘発された生の感情が，心の中へと広がり，心そして自分自身が無限の中へと投げ入れられ，自己自身が無限なる主体となるまで次第に高められ，やがて音調を感得し，非日常的な圏域をくぐってその質を自己の中に抱きつつ，次第に有限なる自己へと立ち戻った時，自己は以前の自己ではもはやない。神的威光に浴す中で再生を果たしているのである。そしてここでは感情素材と自己との内なる応答がなされるため，表面に限定される限界を持つ視覚が入り込む余地はない。日常的な感覚の機能を中断し，非日常的な感覚で世界に係わる時，これまでは見えていなかった物が，つまり，本質が聞こえ出すのである。

詩作のこのメカニズムには，ヘルダリンが弟に読むことをすすめたと言われる「彫刻について」という論文との内的一致が認められると言われる。Heselhausに依ってその論を説明する5）。この中では心は受容能力と再性能力とに分けて説明され，対象によって生み出されるのが受容能力であり，対象についてのイデーを再現，再生するのが再生能力だと述べられている。「再生産する鏡の概念」たる美的感覚のこの再生能力こそ，「予想された全能的印象」つまり精神化によって獲得された心の鏡としての機能なのである。心は鏡として機能する。自然現象を通して自己の心が触れることによって自然は対立するものではなく，対応するものとなり，このようないわゆる覚醒作用によって感情は広がり，心は力強く鼓動し，精神は見えないものに羽ばたいてゆくことになる。自然対象に鏡として対応する心の受容，再生能力，つまり，積極的受動性によって，人間は自然に対し開かれることになる。この共鳴化をひきおこすものこそ心の鏡として本質的な対象の理念を鏡として写しだし，高まった新たな像を生み出し，心の改変せる力があるがゆえに現実を越えた現実を生み出し，本源的な感情を意識的な表現の中で，最初の生き生きとした姿のままで再現することを可能にするのがidea vitaeなのである。聞くということはこのように，自然対象に対し，内的に対応し，自然現象に鏡として対応しつつ再生するということ，隔たりなく対象のイデー，つまり，対象が本質から発する声を聞き取るということを意味し，かくして自然との開かれた応答を生み出すのである。

3.

あの森の木陰の谷間で　私はバラの茂みの間にまどろみつつ
汝の愛の風に吹かれつつ，汝の神々の盃から陶酔をすするのだ。
見よ，汝の若者の頬が　感激のあまり燃えるように火照っているのを。
わが心は誉め歌で満ちている，そして翼は鷲の飛翔を求めるのだ。
河流が広い大洋の中へと流れ入るごとく，すべての時は汝に向かって
急ぎ流れ入るのだ，古の永遠なる懐の中に，混沌の深みの中に汝は住まうのだ。
(GStA 1, 1 An die Stille S. 114)

静けさが，永遠性や原初性を負っている。本来は抽象的で，希薄で，非物質的なものであるが，それが今や具体的にして，物質的な姿となって，眼前にあるかの如く呼びかけがなされている。この静けさについて，L.Mittnerは次のように述べている。

「神的なるものの啓示たるこの自然の音は，ヘルダリンにとっては宇宙的な事件であり，そうあり続けた。エーテルの静けさとは，宇宙全体の神的な顕われであり，物質的にして同時に非物質的な驚異でもある。それは天から地へと流れ下る光の波動であり，無限に調和的なメロディーとなって現れるものである。」6）

静けさはかくして，神的な由来のものであり，地上に下された神の力であり，恵みなのである。

雷鳴の天にあってかの方の印は静かだ。一者はそのもとに立っている，生涯を通して。今でもまだキリストは生きているのだ。
(GStA2, 1 Patmos S. 171)

「雷鳴の天にあって」という雷鳴とは，ヘルダリンの作品にあっては，神の語り，黙示的な表現であって，キリストがすでに来ているか，少なくとも再来しつつ，立ち戻りつつあることの表現である。その中にありながら，「今でもキリストはまだ生きている」というのは，音，響きとしてはキリストはすでに再来しているが，しかし，視覚的にはまだ見えていないということである。静けさとは，このように，視覚化されてはいないが，しかし聴覚化はされうる存在が存在し，力を及ぼしていることを語るのである。

かつて生まれたが，しかしほとんど感じられることのなかったもの，そのものが今ようやく顕わにされている。また，我々に微笑みかけつつ畑を耕していたこじき姿の人々，彼等が次第に知られてきたのだ，一切を生気づかせるもの，神々の諸力が。
(GStA 2, 1 Wie wenn am Feiertage S. 119)

静けさは動きを内包している。静けさの空間は深く，神秘的でありながら，しかし，動的な形容を与えられている。エーテルが，気体，液体，固体というように，視覚しうる形と，視覚しえない形とに変化するように，静けさは，現実として存在しつつも，視覚化されえない霊的な力，魂となっている。その世界は時間，空間の規定を受けることなく彼岸的なものでありつつ，此岸に漂っているのである。かくして静けさの中には，神的な工房，事業と呼ばれる営みが宿され，終末観的な黙示性が付与されることになる。霊的な存在が肉としての存在へ，現実的な姿を得つつあるという。

「これから世の中は，ほんとうに良くなると思う。近い未来を眺めても，遙かに過ぎ去った時代を眺めても，私にはあらゆるものが珍しい日々を，美しい人間性に満ちた日々を，安全な，大胆な日々を，神聖で晴れやかな，崇高で素朴な心性を招いているように思える。このことと，このあたりの雄大な自然とに，私の魂は不思議なほど高められ，満たされている。御前もまた，このきらきら輝く永遠の山々を前にして立てば，私と同じに胸を打たれるだろう。もしこの地球上に，力の神が玉座をもつなら，それは，この燦然と連なる峰の上空である。戸外に出て，まぢかの丘に昇ると，私は子供のようにただそこに立ち尽くすばかりだ。……。私の窓の下には，柳やポプラがみえる。その根元を，すきとおった小川が流れている。すべてが静かなとき，そのつぶやきは何とも言えない。そして私は晴れた星空を仰いで詩を作り，考えにふける。」7）

ヘルダリンの多くの手紙の中でも，これほどまでに自然を慈しみ，自然の黙示的な声へ感動的に応えているものもない。それは，リュネルバァにおける講和条約締結のニュースの感動で生み出されたものであった。この条約締結を記念して，1801年7月14日パリにて大平和祭が催され，これが，ヘルダリンの詩作品の中で，言語表現の濃密さ，詩節，詩行間の叙事的と言ってもいいような類い稀な緊張度，詩文が作る立体性，力強い終末観的な壮大な歴史意識などの点で，最もヘルダリン的と言ってよい「平和の祝祭」の作品を生んだのである。この条約の締結を彼は，まさに，「終末的な神々の帰還のシンボルの中で，人間存在における全ての疎遠なるもの(Entfremdung）の止揚」8）と受け止めたのであった。それまでは，平和という理念として，つまり，霊的な存在としてしかなかったものが，今や実現され，肉の姿を得たのである。神のロゴスが地上において実現され，キリストの再来として象徴化される神の国の実現の確信を彼は得たのであった。ここに，ピィエティスムスの特徴の一つである，現世的敬虔の傾向が現れている。本来抽象的，観念的なものとして視覚化され得なかった存在が，歴史的な現実の中で実現され，視覚化されるようになるという発想である。超越的に，外的に事件が起こるのではなく，歴史内在的な，歴史事象の変化の中に啓示の実現を見る発想である。

静けさにはこのような終末的な思いが込められている。神的な働きが実現され，具体化される工房となり，多くを生み出す生産的な，ヘルダリンが神聖な(heilig）という言葉に託した思いが静けさの中には内包されているのである。静けさとは，有限の存在がいまだに無限の存在であった空間であり，そこから有限な存在が生み出され，またやがてそこに立ち戻ってゆく空間なのである。ちょうど詩〈Unter den Alpen gesungen〉の中で述べられており，〈Rückkehr in die Heimat〉中では，du! stiller Ort! と述べられているOrt（場）が，「あらゆる被造物がそこから由来し，再びそこへ走りゆくところ」9）という意味であり，祭式を行う場として，超自然的な力が啓示され，神の威力が地上にもたら

される入口の意味であるように。

そしてパルナソスの山々，またキティロンでも私は聞く
おおアジアよ！ 汝の響きを，それはカピトールにて屈曲した後
一挙にアルプスから降り下り，異邦人として，我等のところにやってくる，目ざますもの，人々を育て上げるその声は。
(GStA 2, 1 Am Quelle der Donau S. 127)

聖なる思いに駆られて，我々は汝の名を呼ぶのだ，自然よ！
すると新たに，水浴びから出てきたかのように，
汝から，神聖に生まれしもの一切が立ち現れてくるのだ。
(Ebd. S. 129)

古の歌が神の子らについて予言したこと，
見よ！ それらは，ヘスペーリオンの果実たる 我等のことなのだ！
それは不可思議にして，しかし正確に人間たちにあって常に成就されるのだ。
(GStA2, 1 Brotund Wein S. 95)

世界は目に見える風景だけなのではなく，むしろ根源的な力は現象の背後に，静けさの空間の中に隠匿を好み，現象という昼に象徴される形あるものは表面層でしかないのである。世界は2つの層で構成されているのである。

4.

見よ 岩場の荒々しい動物を それは好んで
汝に仕え かつ汝を信頼し，沈黙せる森は
昔と同じく 自らの言葉を汝に語り
山々は教える
聖なる法を汝に，多くを経験せし我等に
偉大なる父がそうなるべく顕らさまに命ずるもの，
汝のみがそれを汝の清澄さをもって我等に告げ得るのだ。
(GStA 2, 1 Unter den Alpen gesungen S. 44)

「アルプスの麓で歌う」という作品で描かれている場は，混沌たる原初時代の神，人間と自然とがあるがままに幸福であった黄金時代の神と言われるサトゥルヌスの世界，個々のものの心の中からの，豊饒なる相互交流が繰り広げられている世界空間である。H. Gaskillは盲目の詩人オシアンの語る，ケルト民族の「オシアン」とこの作品との対比を，主に，登場人物の分析を通して行っている10。)しかし，むしろその2つの作品の根底を形成している，特に語り手の自然意識，人間意識の面からも分析する必要がある。

「オシアン」においては，人間の宿命たる死という，肉体(有限性)から霊魂(無限存在)への移行がいとも簡単になされるゆえのはかなさが，その諦念的な悲しみこそが基本的な情緒を作っている。救ってくれるものは誰も，何もない。キリスト教的な神の救済や終末的な救いへの思いはもちろん存在すべくもない。運命は冷酷に，揺るぎなく人間を襲い，人々はそれを悲しみつつも，受け入れざるを得ない。ここに，ケルトの民の不運に対する諦念が濃厚に現れている。この時，唯一彼等とともに悲しみ，彼らを慰め，ともに挽歌を歌ってくれるのは自然しかいない。汎神論という言葉とも，アニミズムとも異なる，人間的な生動性を担う自然との共鳴感，隣人意識がある。個人としての実に素朴で生き生きとした赤裸々な感情が，自然と融和し，共鳴し表現されてゆく。事件よりもむしろ，事件を通して引き起こされた個人の感情の波動と，それを受け入れ，それに共鳴し，その共鳴音を広げてゆく自然のうねる運動，これこそが「オシアン」の主人公なのである。ここにこそ「オシアン」という作品が復活して，近代の初めに当って人気を博した理由がある。つまり個人意識の高揚と，自然の生動的にして崇高な美しさの発見，個人による自然の体験的なる意識化と賛美という時代背景があったのである。この作品には，人間の原点としての，自然との共生の輪と，人間の生の再確認や，根源的なる生への揺り戻しの訴えがある。

ヘルダリンにおけるアルペンスタイルと呼ばれる詩群における自然意識も「オシアン」におけるそれと同一なのである。すべては個人に収斂される自然と個人との対話であり，共鳴であり，自然景勝や，その動きを通した個人感情の表現である。帰郷にさいしてアルプス山中の大いなる自然に面する詩人，ライン川の源でその川の声を聞く詩人，ドーナウの源でドーナウの河流の響きをオルガンに見たてて，文化，文明の伝搬を連想する詩人は，個人として自然の声に呼応しているのであり，自らの耳で自然の声を聞こうとしているのである。宗教的にこれは，「神的な自然への関与にまで達する再生された人間の新たな自然」とP. シュペーナーが強調する，「個人的敬虔性」が規定する関係である11)。人間の内

面の偉大さをもって，自然の偉大さが個人の感情の中で体験されるのであり，まさにそれこそが「帰郷」における現存せる精神(gegenwärtiger Geist)なのである。

「私が少年だった頃」という作品では，エーテルの静寂は「自然の諸音(Wohllaut)」とも，神々の腕とも言われ，その中にいっさいが集う空間として象徴化されている。集う個々のものが互に，本質的に集うとき，個々のものは相手を名前で呼ばず，「私の心を満たしてくれた」というように，自分自身と対象との境界が薄れ，いわば2つのものの溶液の密度が一致して，相互の交流がなされる様である。〝一緒に遊び〟，〝腕を差しのべ〟，〝喜びで満たし〟，〝親しく知る〟のであり，お互いの心の傾きと，それによる心の均衡化により集いはより真なる，内的な深まりを示してゆく。これこそが森の諸音を聞くということの意味することであり，言葉ではなく動作をもっての対話，伝達のみが機能する状態である。「アルプスの麓で歌う」では，集う個々の物の心のあり方が「無心」という言葉に集約されている。子供のごとき無心の境地の中で，森は「その言葉を汝に語り」，山々は「清らかな法」を解き明かしてくれ，かくしてこそ，「天上的なるものらとともに居る」ことが許されてくるのである。「無心」とは，あくまでも受動的な行為様態であり，認識衝動を遮蔽し，源なる神聖なるものと触れ合うことを可能にしてくれるものである。人間の知の営みとは全く異なるベクトルを持つこの営みの中で，世界の深く，秘められたものとの触れ合いの言わば入口の扉が開かれることになるのである。

神々より送られたかのごとき一つの魔力が，かつて
橋の上にいた私を捕えた，私がそこを通りがかり，
山々のおりなす美しき遠方を眺めやった時に
(GStA 2, 1 Heidelberg S. 14)

ヘルダリンの詩作は，自然現象との共鳴化の感情を起点とし，それに創造的な反省を加える中で，感情に合った最高の形式(音調)が求められ，精神を生気づかせつつ言葉を発現させてゆく過程である。自らと対象とが純粋な音調の中で一致し，音調という宥和した共通項を獲得せんとする。いわば自らと対象とが，音調という共通した霊魂を獲得し，世界の霊魂に触れることで，個と全との境界がやがて消滅してゆく。これが詩作の原点なのであり，それは，自らと自然(素材対象)との深く，全体的なる対話行為なのである。こうして，素材対象の内なる力が聞かれ，その声に手応えのある実質感，実在感が与えられ，言葉という具体化された存在，住み処が与えられてくるのである。ヘルダリンにおける黙示的な文学性はここに由来する。

5．

「三日目の朝になると，雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み，角笛の音が鋭く鳴り響いたので，宿営にいた民は皆，震えた。しかし，モーセが民を神に会わせるために宿営に連れ出したので，彼らは山のふもとに立った。シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り，山全体が激しく震えた。角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき，モーセが語りかけると，神は雷鳴をもって答えられた。」(旧約聖書出エジプト記　19．16-19)

この「出エジプト記」において，モーセの問いに対し神は雷鳴で答えている。神の出現が大地を揺り動かす轟きをもって，「恐れ慄かせる」響きとなってなされるのである。このような，霊的存在たる神が雷鳴をもって現れ，答えるということのモチーフはヘルダリンの作品においてもよく使われている。異質な力の地上における出現は，ちょうど電気放電と同じく激しい雷鳴を伴うのである。しかしこのような状況を，神話的な比喩として理解するようになったのは，かなり近世に入ってからであった。ピィエティストのなかでも，例えば，イエス・キリストの再臨を，天より肉体としてのイエス・キリストが現実にこの地上に下ってくると考える者もいた。終末におけるキリストの再臨を，決して比喩としてではなく，肉眼で見える事実として，現実の出来事として，彼等は期待していたのである。今は霊的な存在としてのイエス・キリストが，いつかは具体的な力として，肉として復活することを信じていた。あるいは少なくとも，かつてキリストが肉としての具体的な姿で地上に存在していた証しとして聖書が残され，聖書を彼等は，摂理実現の確信，肉となってのキリストの復活のよりどころとしていたのであった。

響きという言葉は，霊的存在が存在している証としても使われている。響きという言葉は，ギリシャ・ローマにあっては森の妖精の声として，ゲルマン民族にあっては森の小人たちの呼び声，ヘルダリンのいたシュワーベンでは神々の言葉として，見えない力が発する声の意味で使われてきたという12)。かつての人々のアミニズム的な発想と，霊的存在をも存在として認め，世界の中に霊的存在の圏域を認め，いつくしみと畏敬の感情をもって自然の輪廻の中で生活していたことが，この言葉の意

味合いに現れている。また，ヘルダリンの作品「自然と芸術」においても，豊饒なる黄金時代の神で，今の世の創造主たるサトゥルヌスは，自分の息子によって深淵の中に突き落とされ，今は下の世界で，我が身を長らく嘆き訴えている。訴えの方向は地上のユピテルであり，彼の不滅の術の支配下にある人々に向けられている。この訴えはあくまでも間接的である。サトゥルヌスはかつて視覚に見える形で，現実的に具体的にこの世を支配していた。しかし，今や彼は，視覚的な存在を失ってしまい，視覚の及ばぬ状態でありながら，しかし今も尚存在していることを彼の呻吟の響きが教えているのである。

ヘルダリンには，ホメロス，オシアンら，盲目の叙事詩人らへの強い愛着がある。原初的で，本来的な言葉の力は語りにあり，語りのリズムに響きの真なる伝達性は依拠している。言葉のリズムの普遍性をもって，人と人とを結び付ける伝統的な叙事文学への憧れをヘルダリンが持ち続けていたことは否定し切れない。「盲目の詩人」は，ヘルダリンの世界意識のみならず，彼の言語観をも語っている。つまり，言語表現の射程を越え，言葉を当てがうことの困難な事象に対し，内なる人間・民族の本質からの声たる響きをまず把握し，響きから，その物の本来的で，本質的な思いや内的な語りを判断した結果こそが言葉であるとする言語観を。「ドーナウの源」におけるオルガンの音，遠くへ鳴り響いてゆく雷鳴，ライン川の響き等，響きは，詩人に，その語りを聞き，判断を課す黙示的な提示なのである。そしてそれらの響きは常に，現象の背後に秘む創造的な力と連なっているのである。

> それらを君はたずねるのか？歌の中に彼等の霊は吹き通っている，歌が昼の陽光とあたたかな大地と，さらに荒天の中で生い育つ時，その時彼等は大気の中や，時の奥深き所で，よりよく準備され，より多くの予兆に満ち，我々によりよく聞き取られるようになりつつ，彼等は天と地の間を練り歩くのだ。その時共和の霊の思いは，静かに終末を告げて詩人の心に立ち現れてくるのだ。
> (GStA 2, 1 Wie wenn am Feiertage S. 119)

これはイザヤ書で述べられているメタヒストリカルな存在に対する人間の目の盲目性と一致している。「イザヤは知っている。見えるものに目を奪われている人間が，表面に出ている政治的，戦略的状況を度外視して，その背後にあるメタヒストリカルなものがおりなすものをたよりにすることがどれほど難しいことかを。」13)

背後に潜む大いなる力の存在とその力への畏敬，ヘルダリンの思いの中には，中世神秘主義の系譜に連なるピィエティスムの敬虔性，世界にたいする敬虔な慈しみが現れている。静けさに満ちた空間での内なる沈潜の中で，神的な力に浴しつつ，自らの源の力に応え，あくまでも，人間たちの組織や他の人間を経ることなく，静けさに包まれ，個人が全うき個としてある中で，神的なものと触れ合いがなされるのである。その際，目に見える具体的，現実的なものは意図的に遮蔽され，目に見えない物のみが手がかりとなる。

しかし近代の知は世界の中から，聴覚的力，聴覚的存在としてあった霊的な力実態を排除し，現象として浮かび出ている視覚的な物にしか存在を認めなくなっていた。つまり，イデア的な，本質的な内なる力実態を排除していったのであった。人間が視覚で促えることができる肉としての存在から霊的な部分や霊的存在そのものを排除していったのであった。

ヘルダリンの哲学的な理念には，認識は対立によってのみ可能となるという考えがある。つまり，認識するという行為が基本的に問題を抱えているのである。対象を認識するということは，対象化されたものと，対象として見る側の分裂を前提とする。例えば，カントのコペルニクス的転換によって，認識の対象は主観の先天的形式による結果となり，世界，自然もかくして絶対的に主観的なる姿をとることになる。そのため，人間は認識を経ない世界の本質，物自体を知り得ないのであり，かくして形而上学の存立する可能性は無くなってしまうのである。認識された対象は，時間，空間という主体の側の直観形式によってすでに限定化を受けていて，無限なものではない。認識によって，世界は現象と物とに分裂し，人間は現象にのみ規定され，物自体には到達しえないのである。かくして，一元的な世界意識が先行してゆく。

この意味で感情を知性に対する防御手段とした近代人のあり方は，近代化の波に抗する人間による人間的な危機意識と抵抗の表現であった。その最たるものが，情感の発見とそれによる自然美の発見であり，個人性の強調であった。これを主導したのが，「世界の非神聖化への反発」14)運動たるピィエティスムスであった。その系譜に連なる啓蒙主義期の詩人アルブレヒト・フォン・ハラーはその著「Alpen」においてアルプスの自然美を称え，創造主の栄光の発現とその偉大さを称えた。同じ精神史の状況にあったブロッケスも地上の自然の動きの中に神の栄光の現れを見，自然のどれほどささやかなる美の中にも神の地上への恵み深い慈しみを個人として感得した。ヘルダリンは，シラーの言う，自然との分裂を知

ってしまった情感詩人としての，絶対矛盾に苦悶しつつ，静けさの中に聞き入るという，自然との〝受動的な積極性〟の係わりの中で，このディスクレパンツの克服を試みていったのである。

6．

ヘルダーの聴覚論においてすでに述べたことであるが，視覚が物事の表面に限定された短い射程しか持ち得ないのに対し，聴覚は物の内部の，その物の存在の声を，さらには時間的な射程の広がりの中で，過去や未来をも聞き出す大きなスタンスを担う感覚である。それは，目が対象を一方的に限定し，人間の側からカテゴリー化を行いがちであり—望遠鏡から覗く(GStA 2，1 Dichterberuf S. 47)という警句がこれをよく示している—，その一方聴覚は対象に沿って，主体の側で受動的に自らを打ち開く積極的な敬虔さ，それによる対象との宥和を可能にさせるものである。ちなみに，ギリシャの哲学者ヘラクレイトスは火をロゴスに見立てて，ロゴスに耳を傾ける(Hihhorchen)を知の使命として訴えている。15)

現象の背後に潜み，現象を支配し規定付けている力であり，万物がそこに根拠を持つ層に触れ得るのは聴覚を駆使して聞くことによる。盲目性が示したように，完全に聴覚に依存しなければならなくなった途端に，真理が聞こえ出すのである。人工的なもの(Kunst)に象徴される表面の層がはじけ，自然なるもの(Natur)に象徴される根源的な層が出現しはじめるのである。「パンと葡萄酒」において，叙情的な筆致の下でありながら，しかし叙事的な詩文空間の中でヘルダリンが描いたものは，歴史的な現実世界のこの本質層への転換の確信と願いであった。しかし，詩の中では凝縮して描き出されているこの光景，このような新たなる至福に満ちた時代の到来の可能性は日常的に偏在しており，神の国，夕べの世界の到来は静けさをもって自らを予示しているのである。

しかし彼を知るものはわずかしかいず，その人々には，時代の嵐の中にも
時折明りが差し込むかのように，その人が立ち現れるのだ。全てを宥和しつつ
静けさを残しつつ，
彼は貧しき人々とともに立ち去っていった，この至高の人は
霊となって神々しく。
(GStA 1，1 Meiner Verehrungswürdigen Großmutter S.272)

静けさと静けさの内包する力，この一見非顕在的な空間の中に世界の本質からの声が響きわたっている。静けさの中で聞くということは，まさに宗教的な静謐さであり，世界との崇高にして，安定した，宥和的な関係を語り，霊的な存在が肉的存在として存在し，また肉的になりつつあることへの確信に基づくものである。それは「単に霊的王国の王であるにとどまらず，現象界の王でもある」16)イエス・キリストの地上からの離別という神話的なモチーフが語る，霊と肉との分裂の意識を克服せんとする志向であり，肉の背後に霊の存在を措定し，同時に，肉より霊へと心のアクセントを移動させようとする試みである。それは，視覚的には非存在であるものに存在を認め，または，その存在が視覚化される形へと姿を現しつつあるものとして認めてゆくことである。

「わたしたちは見えるものではなく，見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが，見えないものは永遠に存続するからです。」(新約聖書　コリントの信徒への手紙　2．4．18)

永遠なるものは見えないものであり，直接には自らを語りだし得ないものである。自然は言葉でなく，響きのみをもって自らを伝えようとする。静けさの中で永遠なるものと無心に語り得る人間のみが，つまり，詩人のみが永遠との語りの中で，永遠の形相に言葉を与えることで，永遠なるものに留まる存在空間を与えうるのである。黙示的な永遠なるものに姿を与え，非視覚なるものを視覚的なものへと具体化する仕事が彼には課せられている。

ピィエティスムスのエーティンガーは hörbar という言葉について次のように述べている。「この暗い時代に人々は，真の光りが差すまで推理によって理解しなければならない。……。待ち望んでいる時，その変転する日々において，救済者が現れ，目の前にやって来るまで，生成は聴き得る(hörbar)のみなのだ。」17)

「晴れた夜はこの果実園の木陰をさまよい，私達の胸に宿る神，愛の神の言葉に耳を傾けるであろう。その時草木は真昼の眠りからそのうなだれた頭をもたげ，優しいその腕が露にぬれると，花の静かな生命は甦ってくる。」18)

ヘルダリンにおける静けさの中で聞くということのなかには，法的—機械的世界秩序と対立する ordo generativ(生成の秩序)の信仰を旨とするシュワーベン

ピィエティスムスの聖書主義が色濃く現れている。19)世界の一切，歴史の法，神の救済はすべて聖書の中に描かれており，その，理念的，非顕在的なものが，歴史の進展過程の中で，次第に現実的な姿を取ってゆくという考え方である。

「神は全被造物を，完成を目指す緻密な救済計画に則って段階的に導いている。この救済計画，神のエコノミーは，ベンゲルによれば，聖書の中に貯えられているのである。」20)

聖書主義がヘルダリンの詩文の精神の中に脈々と息づいているのである。このようなヘルダリンの思いの根幹には，現実世界へのあくまでも否定的な，絶望的な思いがある。テュービンゲン Hymne のロマン派的な飛翔から立ち戻っても，ヘルダリンと現実との関係は同じく否定的であった。現実世界への絶望感から彼は，一方ではライプニッツ予定調和思想の確信を持つことで，現実とあくまでも間接的な係わりを持ち続けた時期もあった。ヘルダリンには，ゲーテのリュンコイスのような，ギリシャ的な，現実を現実として見据える，現実肯定の高らかな響きはない。現実の背後への思い，歴史展開における終末的な待望論，これらは，不毛で否定的な現実意識に裏打ちされたものである。

否定的な現実世界の中に，穏やかな世界の可能性を宿している静けさ，これこそがヘルダリンの詩精神の滋養分であった。それは，歴史展開への揺るぎない確信をも彼に与えてくれるのであった。キリストが静かな人と呼ばれるのは，多様で激しい世界の動きの中で，その成り行きについて，啓示が実現されることへの揺るぎない確信に基づいた安定した人間なればこそなのである。同時にそれは，黙示的な力強い形姿で，人々の心にその人の行為が柔らかく，心の内へと影響し伝搬してゆく故である。聖書の静かな輝きも，その中の真理が必ず実現されて行くという絶対的な真理が人々の心に大いなる磁気力となって影響を与えてゆくことを語っているのである。このような静けさの力こそヘルダリンが自分自身，自らの詩作品に対して求め続けたものでもあった。

—註—

Hölderlin の作品及び論文は Grosse Stuttgarter Ausgabe (以下 GStA と略す) W. Kohlhammer Verlag 中の Hölderlin Sämtliche Werke 1, 1
Gedichte bis 1800
Hölderlin Sämtliche Werke
Gedichte nach 1800
Hölderlin Sämtliche Werke
Empedokles Aufsätze
より訳した。但し，Friendensfeier については
Hölderlin Sämtliche Werke Gedichte I 1970 Detlev Lüders Athenaum Verlag
を訳している。
また，本文中の聖書引用については，『聖書 新共同訳』1987 日本聖書協会を使用した。

1) ローベルト・ハイス：1970 年『弁証法の本質と諸形態』 未来社 P. 61
2) ヘルダー：昭和 54 年『彫塑』(中央公論社 世界の名著 38 ヘルダー・ゲーテ) P. 217
3) Herder：1982 "Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker(in Herders Werke zweiter Band) S. 235
4) K. コッホ (荒井章三・木幡藤子訳)：1990 年 『預言者』 教文館
5) C.Heselhaus：1952 Hölderlins idea vitae Hölderlin Jahrbuch 1952 S. 17 ～ 50
6) L.Mittner：Motiv und Komposition Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Lyrik Hölderlins Hölderlin Jahrbuch 1957 S. 76
7) ヘルダーリン全集 4．論文/書簡 1969 年 河出書房新社 P. 451
8) Jochen Schmidt：Friedensidee und chiliastische Geschichtsdenken in Hölderlins 'Friedensfeier' (Manuskript) S. 5
9) Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens de Gruyter Bd. 6 S. 163
10) H.Gaskill：Hölderlin und Ossian Hölderlin Jahrbuch 1990-1991 S.100-130
11) M.Schmidt：Pietismus 1983 W. Kohlhammer S. 5
12) Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens de Gruyter Bd. 2 Echo の項
13) 4) と同一書 P. 239
14) W. Dierauer：Hölderlin und der spekulative Pietismus Württembergs S.VIII
15) V. Spierling：Kleine Geschichte der Philosophie 1990 Piper S. 31 ～ 33
16) 新約聖書略解 1986 年日本基督教団出版局 P. 769
17) 14) edb. S. 102
18) F. ヘルダーリン：ヒューペーリオン 渡辺格司訳 1936 年 岩波書店 P. 194
19) J. Schmidt：Hölderlins geschichtsphilosphische Hymnen Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1990 S. 190 ～ 234
20) 14) と同一書 P. 12